



# 里山の管理と 資源利用への提案

神戸大学森林資源学研究室教授 黒田慶子

環境保全の上で森林の重要性に注目が集まるが、放置森林の管理再開は容易に進むものではない。補助金は管理を再開する駆動力にはなるが、SDGsの観点で森林を持続させるには、森林所有者の収入を増やして管理意欲を出していただくことが非常に重要である。筆者は病虫害の研究と森林管理の指導に長年携わってきた経緯から、持続的な管理には本気の目標と戦略戦術が大事なことを痛感している。日本の国土の3分の2を占める森林の植生や健康状態は、地域ごとに異なり、「適正に間伐する」「病虫害を適宜防除する」のような指示は役に立たない。資源利用という意識のない団体への管理委託では、むしろ悪影響がある。人工林には様々な補助制度があるので、本稿では里山の管理を中心に将来への提案をしたい。

## 農家へのお願い…放置林の将来

昨今の森林管理不足は、林業を営む「林家」の課題ではなく、実は「農村集落」の課題である。農村を取り囲む里山には昔の薪炭林やアカマツ林（マツ枯れ後の広葉樹林含む）がある。統計上は天然林・天然生林とされるが天然の林ではなく、人の手により長年管理されてきた林で、本稿では里山林（里山二次林）と呼ぶ。人工林に匹敵する広大な里山林の所有者は、農村集落や農家で、昔は燃料や肥料（落ち葉）など生活や農業に不可欠な資源生産の場所であった。しかし1950年代から利用がなくなり、一部にはスギやヒノキが植栽されたが材価が低下

し、里山は「不要なのに固定資産税がかかる邪魔者」になってしまった。

人の手で管理されてきた里山林は、放置しても原生林には戻らない。里山林の植生調査に伺うと、所有者から「どうすれば良いのか」と問われるが、今後の計画のためには、まず伝統的な管理方法について知っている必要がある。薪炭林では、20-30年程の周期で小面積ずつ皆伐し（写真1）、



（写真1）今も続く炭焼き用クヌギ林管理  
兵庫県川西市

切株からの芽生えで樹木を再生させる「萌芽更新」を続けてきた（写真2）。抜き伐り（間伐）ではなく小面積を全部伐るの

は、地表を明るくして次世代の木を



（写真2）クヌギの切株からの萌芽

育てるためである。その定期伐採を半世紀前に中止した結果が今の暗い林で（写真3）、地面



（写真3）約60年生の旧薪炭林（兵庫県丹波篠山市）

には陽が差さず、新たな芽生えが育っていない。田畠を日陰にするほか、田畠を荒らす野生獣類の隠れ場所ともなる。近年は大径のクヌギやコナラが枯れる伝染病（ナラ枯れ）が広がり、家屋などへの倒木の危険性が高い。今実施すべきことは伐採によるリセット、つまり若齢林化である。温暖多雨の日本（北海道除く）では、放置すれば人も踏み込めない鬱蒼とした森になりやすく、急峻な地形なので災害の危険が増す。とはいえ薪炭を使う生活には戻れないので、今の生活にあった伐採木の利用について考え、里山管理の目標を新たに作る必要がある。

スタジオジブリの「となりのトトロ」に描かれている農村の景色は、時代設定の1950年代ではな



（写真4）「となりのトトロ」に描かれた放置里山制作当時の1980年代の景色（利用許可画像）

く制作当時の1980年代のものである（写真4）。放置された里山の大木や、繁茂して田畠を日陰にしている様子を「理想の里山」と誤解されるもととなった。近年の里山整備では下生えや細い木を伐っているが、それでは次世代の若木が育たず、ナラ枯れを助長して森林は持続しない。日本は北米や欧州の寒い地域（高緯度地域）とは樹種も成長速度も異なり、スイスやドイツの手法をそのまま手本にできないことにも気づいて欲しい。

### 森林の「資源」とは

「木材は安くて伐っても赤字になる」といわれる。そこには、「どうせ売れない」という諦めがないだろうか。現在の広葉樹林の蓄積は非常に多いが、ナラ枯れによる大木の損失が急激に増えている。筆者は、薪としては使い切れない大径木が増えたことを逆手にとて、木材としての利用に取り組んでいる。里山は燃料の山だから良い木は無いと言われるが、そんなことはない。農村で木材生産に無縁であった地域が多いので、資源の価値が見えないのだと思う。広

葉樹材の価格は樹種や材質により幅が広いが、10~20万円/m<sup>3</sup>（丸太、板材）のあたりで、針葉樹よりも魅力的な価格である。

家具やフローリングに使われる木材は主に広葉樹材で、今、その大半は輸入材である。日本にも同様の材がたくさんあるのに、北海道など一部の地域を除いて山から出荷されないのである。輸入材のオーク（檜：ミズナラ、クヌギ、コナラ）、チェリー（桜）、ウォールナット（クルミ）、ビーチ（楡）、メープル（楓）は、括弧書きの日本産種に対応する。温暖な日本の森には欧米よりも多数の樹種が生育し、良質材の木としてエノキ、ケヤキ、クスノキ、キハダ（樹皮を生薬に使用）も里山に多く見られる。広葉樹人工林がある北米では、品質のそろった材を大量に供給するので、日本の企業は輸入を続けてきた。しかし、材価格の上昇や、安定した輸入への不安から、一部の企業が国産広葉樹に目を向けつつある。国内の製材関係者は「（北海道以外の）国産広葉樹は品質が悪い」というが、国産広葉樹は樹種が多く、それらの癖に慣れていないことや、低質材が混じることへの警戒であろうと捉えている。現状では、家具などに使える材が、価格が10分の1以下のパルプや薪になっており、大変もったいない。本来、「適材適所」とは人材配置のことではなく、「木材はその特徴にあつた使い方をしなさい」という格言である。里山の木の価値が正当に評価されたら民有林の新たな収入にでき、同時に里山林の管理再開につながる。急斜面の伐採は難しいが、民家や畠に接する森から実施することを提案している。

今後の課題は里山材の流通促進である。大

半の地域では木材利用の経験が無いが、家具製造が地場産業という地域から推進して手本ができると、流通の流れが作れると考えている。もう一つの課題は、伐採木がまとめて安値で売却される点である。大径木や銘木（工芸的価値のある木）だけでなく、上述の多種の樹木に材木としての価値がある。販売先を想定せずに伐採・製材していくには有利な売却は難しい。家具会社の希望する樹種や量の要望に答えるには、森林の在庫の把握（どこにどんな木があるのか）が不可欠である。筆者が取り組むのは、森林内で樹幹に電子タグを着けて樹種や太さなどの情報をデジタル記録し、カタログとして提供する方法である。伐採前に買い手を見つけることや、少量多品目の広葉樹を量的に集めて販売することを目論んでいる。四国の上勝町で成功した「葉っぱビジネス」とも共通する部分がある。古い商習慣では無理だったことが、電子情報の利用を含めた工夫から可能になることに、ぜひ気づいていただきたい。

## 無形の資源…

### 森の恵みを広くとらえる

森林によっては、雨量や土壌の関係で資源量が少ない場所もある。そこでは木材販売による収入化は期待できず、まとめて伐採すると次世代林の再生に時間がかかることになる。マツ枯れ跡地によく見られるが、そのような地域では別の視点で森林資源の使い方を検討したい。つまり「無形の利用」である。ガイド付きの森林散策、ハイキングや野遊びの指導、農業体験や農家民宿と組み合わせた森林体験、ジビエ（野生

# 里山の管理と資源利用への提案

獣肉の料理) の提供などが挙げられる。重要なことは、地域外(都会)からの来訪者の消費を、地域の収入にする仕組みである。薪を無料で知人に分けたり、所有林での自由な伐採を許可しているのを見るが、それは「里山は無価値」という認識だからだろう。しかし多様な森林活用によって地域外から滞在者を呼び込めたら、それを財源にして里山管理を続けられる。過疎化や耕作放棄地の拡大に歯止めをかける一つの案として自然ガイドという仕事を作り、UターンやIターンを推進してはどうだろうか。コロナ禍を経験した今は、個人や家族単位の野遊びが流行りつつある。都会の人々は自然についての知識が不十分になっているため、安全な森林散策にはガイドが必要である。自然ガイドの養成に力を入れることで、観光資源として魅力のある森林への誘導を目指すことができる。

## だれが管理を担うのか

田畠や森林は、その所有者が生産物を売って収入を得ることだけではなく、環境保全や国土保全の面で大きな役目を果たしている。所有者以外の人々も様々な恩恵をうけているのである。生物多様性(種の多様性)の豊かな場所は、里山から田畠の畦にかけての場所、つまり人が昔から資源を使いつつ管理してきた場所である。薪炭林で若木の多い林は地面が明るく、カタクリやランの仲間など山野草や生薬類の生育に適した場所だった。近年の里山林は茂りすぎて暗くなり、様々な生物の生息に適さなくなつて、絶滅危惧種の増加にもつながっている。森林に依存する生物は「人間も含めて」多種多様である

が、森林の状態が変わってから慌てても元には戻せないのである。

森林の管理義務はもちろん所有者にある。しかし、上述のように公益的な役目が大きいこともあって行政によるサポートが行われてきた。都道府県には林務課があるが、林業地ではない市町村には森林の専門職員はほとんどない。府県の専門職が全市町村の森林管理の指導を担うことはできないので、いろいろ勘違いがあり、管理方針が具体的に定まらない地域が多いのが現状である。農地管理とは大きく異なるので、少しでも早く林務部署の設置をお願いしたい。森林の今後の動きが見えて、トリアージ(優先順位を決める)が出来る人材が必要であり、そこさえ押さえたら、里山は地域の宝の山に転じるのである。森林環境譲与税を上手く将来のために生かせるかどうか、その瀬戸際にある。

黒田慶子(くろだけ いこ)



1956年奈良県生まれ。京都大学大学院農学研究科林産工学専攻、1985年農学博士。森林総合研究所において病虫害および森林管理・保全の研究担当を経て、2010年より神戸大学農学部教授。日本森林学会会長、日本木材学会理事、大日本山林会理事などを歴任。2019年より農林水産省独立行政法人評価有識者会議農林漁業信用基金部会委員。著書に「森林病理学」「ナラ枯れと里山の健康」など。